

フィリピンとの掛け橋

第8号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2005年11月22日

ダグソン執事滞在特集



10月6日(木) 鹿児島中央駅で

ダグソン執事、2週間滞在

9月27日(火)から、10月11日(火)、フィリピン中央教区のシルベスター・ダグソン執事が九州教区に滞在し、小倉インマヌエル教会と厳原聖ヨハネ教会で主日礼拝の説教を担当、また、その前後も福岡、北九州、筑豊、熊本、鹿児島各地を訪問し、交流を深めた。

ダグソン執事の日程

9月27日(火)午後2時、福岡空港に到着。福岡の教区センターに宿泊。
28日(水)福岡周辺を見学。
29日(木)新幹線で北九州に移動。戸畑聖アンデレ教会に宿泊。
30日(金)直方訪問後、石田聖職候補生宅に宿泊。
10月1日(土)小倉信徒佐々木姉宅訪問後宿泊。
2日(日)小倉で礼拝、交わりの後、教区センター泊。
3日(月)福岡市内訪問後、夜歓迎会。
4日(火)菊池黎明教会、降臨教会訪問後、阿蘇のペンション「あざみ亭」宿泊。
5日(水)熊本城等見学と買い物。熊本聖三一教会宿泊。
6日(木)鹿児島へ日帰り旅行。女性部との昼食後、桜島、ザビエル記念聖堂訪問、熊本へ帰る。

7日(金)花岡山、ジェーンズ邸見学後、福岡空港経由、厳原聖ヨハネ教会宿泊。

8日(土)対馬に住むフィリピンの女性たちと共に礼拝と交わり。

9日(日)厳原聖ヨハネ教会礼拝説教。交わりの後、福岡で、フィリピン協働委員会に出席。

10日(月)福岡ベテル教会礼拝堂聖別式に出席。午後は西新近辺で買い物等、散策。有志による送別会。

11日(火)最後の買い物と天ぷら屋さんで最後の午餐。午後福岡空港から出発、フィリピンへ帰国。

目次

ダグソン執事、2週間滞在 概要	1
ダグソン執事福岡滞在記録	1
北九州でのダグソン執事	2
福岡での教区歓迎会と熊本、鹿児島への旅	3
対馬の訪問	3
その後の日程	4
10月2日説教 与える賜物(小倉)	5
10月9日説教 神様の招き(厳原)	7
旅を終えたダグソン執事からの挨拶状	9
来年のキャンプに向けて	10

ダグソン執事福岡滞在記録

藤井東秀



9月27日 定刻 午後2時過ぎ福岡空港に到着、五十嵐主教、養田姉妹、藤井が出迎え、ホッと一息。

その後、九州教区センターに到着。重益、吉武、中村さんの歓迎を受けられました。(写真は中村姉と)



9月28日

外池圭二さんと藤井東秀が、福岡近郊を案内することとなりました。外池圭二さんと藤井東秀が、福岡近郊を案内することとなりました。

地下鉄・大牟田線を経験していただき、大宰府天満宮境内を散策、少々戸惑いながらも興味津々な様子でした。



抹茶や梅ヶ枝もちを楽しみ、その後福岡市の中心地、天神で回転すしも体験。

わずかな時間しか滞在できなかったけれど、きっと良い思い出と体験で今後役に立てていただけることと信じています。

北九州でのダグソン執事

江崎芳子

9月29日(木)夏の暑さがまだ残っているこの日、博多から一人新幹線に乗り小倉駅に降り立ったダグソン執事は満面の笑みを湛え、気取ら



ずピュアな性格そのもので2年振りの再会をハグしながら喜んだ。小倉城では歴史の中でも庶民の生活・食事内容などの展示物、またジオラマや籠に乗ったりと子供のように純粹で気さくな一面を改めて感じた。

東姉宅では即興の聖歌隊(3人で)が賛美の歌を、またDaguson's Storyを聴きながら共に心からの交流が出来たと感じたひと時。『二人または三人が私の名によって集まる所には、私もその中にいるのである』(ああ！実感)

戸畑では柴本司祭ご夫妻によるおもてなしと、直方・小倉に於いては石田姉・佐々木姉宅でのホームステイ。ダグソン執事も興味ある日本事情を垣間見た様子で物価などの質問を盛んに連発していた様子。



(ホームステイ先 佐々木姉の感想)

夫婦とも英語が話せないけれど、バーベキュー・パーティを楽しんでいただき、国際色豊かな交わりが出来て良かった。

(石田みち子姉の感想。)

『旅人のもてなし』を体験でき感謝。

ダグソン執事との心からのふれ合いを通してフィリピン事情を知ることが出来、また執事の自然で純粋な人柄に好感を覚えた。



(佐々木姉宅でのバーベキュー)

福岡での教区歓迎会と

熊本、鹿児島への旅



小林史明

北九州での交わり、小倉での礼拝説教などを終えたダグソン執事は、福岡に移動。翌日の10月3日月曜日は夕方、教区歓迎会に出席。フィリピンの歌と踊りを披露。また、出席者はフィリピンに関するイメージをゲームで分かち合って親睦を深めた。

10月4日火曜日は、菊池黎明教会を訪問。太田執事と懇談後、同師の中学生に対するハンセン病問題啓発講演に参加の後、リデル・ライト記念老人ホームを訪問。建築中の降臨教会礼拝堂など見学の後、豊肥線に乗って、阿蘇の乙姫ペンション村、石束夫妻経営の「あざみ亭」に宿泊した。しかし翌日5日は生憎の雨。阿蘇山の眺め

も期待できないので午前中に熊本へ移動。熊本城と水前寺公園を見学した。

10月6日木曜日は、大牟田訪問の予定だったが、都合が悪くなり、急遽鹿児島に変更。中野司祭と島紀夫兄の案内で、城山、磯庭園、桜島、フランシスコ＝ザビエルの遺骨があるカトリック司教座聖堂などを見学した。この間に、鹿児島復活教会で、女性部の人々と昼食を共にし、夕方には熊本に帰った。

10月7日金曜日は、熊本の中村勝子姉の案内で、熊本



バンドゆかりの花岡山とジェーンズ邸を訪問。プロテスタントの歴史を学んだ後、福岡空港へ移動。牛島司祭と合流した。

対馬の訪問

牛島幹夫

シルベスター・ダグソン執事が、厳原を来訪した7～9日のことを牛島司祭が報告します。

10月7日金曜日

16時45分着のANA機にて厳原到着。シルベスターは飛行機が苦手なようで、しきりにおなかを押さえて苦笑いをしていました。到着後少し観光をしてから教会へ向かいました。

この日の夕食はカフェで食べました。シルベスター執事はご飯が好きで注文の際にはご飯がついたものを食べたいと言われご飯のおかわりもされていました。日本のお米が気に入られたようです。また照り焼きチキンを気に入って店の人に作り方を聞いていました。家族に作ってあげたいとのこと。シルベスターは家族をとっても大切にしています。後日、照り焼きソースをプレゼントしました。

8日土曜日

シルベスター執事は早朝に起きて近所を散歩されていました。静かな厳原のたたずまいを非常に気に入ったようです。迎える側としてはとてもうれしいことです。

午前中、牛島司祭が参加している子供を対象にした地域のプログラムに参加しました。ハロウィンの衣装を子供達と一緒に作って楽しみました。



午後2時半からは、対馬在住のフィリピン人のための聖餐式を行いました。対馬在住のフィリピン人が15人。結婚している相手(日本人男性)が2人。そして、その

子供達が全部で 5 人。おなかに赤ちゃんがいる人が 2 人。フィリピン人のための聖餐式はこの 4 年間で 3 回目ですが、以前にくらべて日本人と結婚している人が増えたように感じます。短期滞在から日本定住へ向かっている人が徐々に増えているようで、その面から見ても、フィリピンから聖職者が来ることには大きな意味があるように感じました。シルベスター執事はこの聖餐式の時に一番生き生きとしていたように思います。日本出張も終盤を迎えていましたが、フィリピン人に出会ってしかも説教をすることができて、ほっとされたのだと思います。フィリピンの方を対象にした集まりがあるということは、これから交流を考えていくに当たっても非常に重要なことだと思います。

9 日日曜日

この日は主日の聖餐式において説教をしてもらいました。主日の福音書をとおして、わかりやすいメッセージを心がけている印象を受けました。礼拝後には昼食を教会のメンバーと一緒に食べて交流しました。夕方に開催される会議に出席するために 2 時 20 分発の飛行機に乗る必要があり、あまり時間がとれませんでした。良い時を過ごすことが出来たように思います。

シルベスター執事は、とても家族を愛する方で、家族の写真を見せるときのうれしそうな顔が忘れられません。優しい人柄がにじみ出てくるような方だったように感じています。

また、食に非常に強い関心を持っておられ、いろいろな植物の種をフィリピンに持って帰って植えたいと言っていたのが印象に残っています。

(報告、司祭牛島幹夫)

その後の日程

10月9日は、午後5時から、フィリピン協働委員会に



出席し、それまでの訪問の反省など、各地での交わりに

ついて、受け入れ側と、訪問したダグソン執事のそれぞれの感想を述べた。会議の後は、宗像の荻本敏展兄の案内で、福岡市内の居酒屋で夕食会。



10月10日は、福岡ベテル教会の礼拝堂聖別礼拝に参加した。午後は、西新の百円ショップで物色。安いシャンプーなどは、フィリピンの教区事務所で働く女性たちにプレゼントすること。上の写真は、西新商店街で、回転焼きを食べているスナップ。夜は、福岡の有志による送別会が、焼き鳥屋で行なわれた。

帰国する10月11日は、午前中、ドンキホーテで、即席味噌汁や日本のチョコレートなどを購入。また、フィリピンの山を歩き回る彼のために、丈夫なスポーツシューズがプレゼントされた。昼は、濱生司祭の案内により、天ぷら屋さんで最後の午餐。

キリスト教書店で、渡辺禎雄の版画による聖書の絵葉



書を購入後、福岡空港へ向かった。

(最後に、教区歓迎会の集合写真を一枚。)

このあとは、ダグソン執事が行なった、小倉と厳原での説教を掲載します。

2005年10月2日 小倉インマヌエル教会

聖書：マタイによる福音書 21 節 33 節～46 節

「与える賜物」

皆さん、おはようございます。聖公会フィリピン中央教区のディクシー・C・タクロバ主教、及び聖職者、教役者、教会会衆を代表してご挨拶申し上げます。私は、シルベスタ・S・ダグソンと申します。宣教の拠点となっている St.アグネス聖公会、St.フィリップ、St.ジェイムズ教会及び、説教の拠点となっている St.マティアス教会で執事を務めています。妻のシャロン・ガストダグソンは現在教区のキリスト教教育のコーディネーターとして働いています。子供は、10歳のマーク・ジョージを筆頭に、9歳のシャラリー、6歳のジョン・マイケルと3人おります。



(小倉で説教中のダグソン執事と通訳の石田姉)

神様は本当に善い方で、私に今回皆さんの美しい国を訪問するというすばらしい機会を与えてくださり、また主にある兄弟姉妹の皆さんと交わりと時をもつことをお許しくございました。

私は、以前フィリピンに来てくださった小林司祭、牛島司祭、Fr.アンドリュー、江崎夫人、その他私たちの教会でのワークキャンプに参加してくださった幾人かの方にお会いしたことがあります。今回この教区でいろんな教会を訪問する中でさらにたくさんの方々とお知り合いになりたいと思っています。

今朝の説教のテーマは「与える賜物」です。キリスト者はイエス・キリストにあって一体です。私たちは、一つ

の体、すなわち私たちの主イエス・キリストに属するものです。イエス・キリストは私たちの頭(かしら)、私たちの指導者です。人種が何であれ、日本人であっても、フィリピン人であっても、またアメリカ人であっても、キリストにおいて私たちは兄弟姉妹です。私たちは、しかし、今日の聖書の箇所に出てきた農夫たちのように、欲や身勝手さのために引き裂かれてしまうことがあります。欲と身勝手さは十字架の敵です。

「与える」ということを語るとき、私たちはお金や大切にしている物をあげることを考えてしまうことがありますが、「与える」ということは金品に関することだけにはとどまりません。時間や才能、技術、力といった自分の持っている他のものを分かち合うことをも含むのです。「与える」という賜物を頂いているひとがいます。神様はこの人たちに与える心を与えられました。このような人たちにとっては、「与える」という行為は喜びであり、いつもどうやって与えるか、という方法を探しています。愛情をもって自己を犠牲にして与えるのです。彼らにとって与える、ということは使命なのです。では、私たちが与える、ということの喜びを体験するためにはどうしたらよいでしょう？

まず、しなければならないことは、これです。私たちは、すべてを所有しておられるのは神である、ということを知っておかねばなりません。この世界すべては神様のものなのです。私たちが与えるもの、それも全てすでに神様のものなのです。それは、神様が私たちに与えてくださったものなのです。詩篇の作者は「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」(詩篇 24 編 1 節)と喜んで記しています。

私たちが何を与えるにしても、それを神様にあげるべきでしょう。教会とか何かの予算のためにあげるのではありません。私たちは、人に認めてほしいから、またじぶんの名前を何かに刻んでほしいから、という理由で与えるべきではありません。私たちが差し出すものは、もともと自分たちのものではないのです、神様のものなのですから。繰り返して言いますが、私たちは、教会にあげるのではなく、神様にあげるのです。

私たちが与えるのは、私たちが神の御国を愛し、神の御国が大きくなり、栄えることを望むからです。私たちは、この世で神様の働きがなされることを望んでいま

す。私たちは、神様から頂いたものを、神様にお返ししたいから与えるべきなのです。私たちが十分の一の捧げ物をするのは、私たちが持っている全てのものは神様から与えられたものだということを知っているからです。そして与えられたものの幾分かを神様にお返ししたいからなのです。与えることは私たちに大きな喜びをもたらしてくれます、というのも私たちはイエスがこう言われたことを知っているからです。

「与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、ゆすり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤（はかり）で量り返されるからである」(ルカによる福音書 6章 38節) これは、約束をともなった聖句です。

私たちが喜んで与える、ということにおいて成長するために必要な 2 番目のことは、これです。私たちは、スチュワードシップ、管理したり世話したりする力をもった生き方をしなければなりません。今日お読みしたお話の中に、裕福な家の主人が出てきました。この人は、大きな土地をもっていてまた、この土地に大きな投資をしていました。このお話の中の主人は、神様を表しています。かれは、ぶどう園をつくり、その周りに垣を巡らし、その中に絞り場を掘り、見張りのやぐらを立てます。そして幾人かの人(この世の人一般を表す人々です)を選び、この人々に、この土地と収穫の管理を任せます。しかし、土地の管理を任されていたこの農夫たちはその土地を所有したいと思います。主人がすべての所有権を持つことを望まず、自分たちが全てを所有したい、と思うのです。そこで主人が当然自分のものである収穫物を受け取ろうと僕(預言者を表しています)を遣わすと、農夫たちは彼らに危害を加え、殺してしまいます。ついに、主人は自分の一人息子を遣いにやるのですが、農夫たちはこの息子をも殺してしまいます。彼らはこうっています。「これは、跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。」この世の人々は、神様が持つておられるものを横取りしようとしてきたのです。

財産を管理する人は自分では何も持っていません。ただ、真の所有者の持っているものを管理運営しているに過ぎないのです。管理人は、自分が手元にもっているものが自分のものだとは思いません。よき管理人は自分のお金や持ち物を、神様のものだと思えるのです。彼は、神の栄光のため、また他者のために使うようにと、それらのものを預けられているのだということを理解していま

す。よいスチュワード、すなわち管理人はただ自分の必要や望みを満たすのでなく、自分の持っているものを神の御国のために用いていただきたい、と願うのです。自分の持てるものを真の所有者に受け渡すのです。

聖書には「各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。」と書いています。

ここに使われている「喜んで」にあたるギリシャ語は、「ヒラロス」という単語ですが、この単語は英語の "hilarious" (陽気な、笑いを誘う、という意味です) の語源となっています。私の義理の父の名前は、ヒラリオン、といます。ギリシャ語の「ヒラロス」に由来する名前かどうかはわかりませんが、彼は「喜んで与える人」のお手本です。喜んで娘を私にくれましたから。冗談はさておいて、彼は 79 歳の現在に至るまで、自分の持てるものの 1 割あるいはそれ以上を主に捧げています。彼は、私たち、子供たちだけでなく他の人々にも祝福を分かち合う人です。

神様は、喜んで与える人を愛してくださいます。他者に与える、ということは恵みなのです。それは、負担ではなく喜びです。与えることによって私たちはより多くのお金とより多くの物を得たい、得なければならない、という強迫観念から解放されるのです。

本当に必要とする以上に富や財をためこんでしまうのは強欲です。強欲はこの世の最も大きな罪の一つです。強欲は、十字架の敵です。十字架は、自己を与えることの象徴、真の思いやり、他者を大切にす気持ちのために命を与えることの象徴だからです。

与えることによって、私たちはお金に関する心配、という負担から解放されます。与えることによって自分自身よりもむしろ他者の必要としているもの、状況に目が行くからです。私たちは、自分たちのことは神様が面倒を見てくださる、と信頼しています。だからこそ、寛大になれるのです。また、与えることにより、主のお働きに参加することができます。与えることにより、また分かち合うことにより、仕える人の一部になるのです。自分が奉仕、あるいはお手伝いする人の苦悩、進歩、成功の一部となるのです。

それに対し、自分がすべきことをせず、また自分に何かができる状況において何もしないなら、敗北、痛み、十字架の死、そして時には仲間の人間の死の一部に参画していることになるのです。私たちはマタイ 25 章 40 節に描かれた「最後の審判」で投げかけられた問いを思い起こさねばなりません。「私が飢えていたとき、のどが渇いていたとき、裸であったとき、病気の時、牢にいたとき...私を助けたか。」私たちは、神が私たちの面倒を見てくださることに信頼しています。だから寛大になれるのです。私たちはイエスの言葉を覚えています。「だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に勝ちあるものを任せるだろうか。」(ルカによる福音書 16 章 11 節)

私たちの生き方が、ぶどう園の身勝手な農夫たちによって示されたような強欲によってではなく、与える賜物によって特徴づけられるようにしましょう。キリスト者として、イエス・キリストを仕えるべき主人、真似るべきお手本として、救い主、主として従いついていきましょう。イエスは、自分を無にしてご自身の命を、ご自分の全てを与えてくださいました。それは私たち全てが他者に仕えることで、生き、喜んで与える者となるためでした。

私たちが、今していることも、与える行為の一つです。私たちは、感謝(thanks)を捧げている(giving)のです。聖餐式は“The Great Thanksgiving”、字面通り訳せば、「大いなる感謝」と呼ばれます。神様は私たちに命と守るべき掟を与えてくださいました。私たちに王を与え、預言者を遣わしてくださいました。そして、御子を与えてくださいました。御子イエスは私たちに「道と真理と命」を教えてくださいました。そのお返しに、喜んで仕え、喜んで私たちの命を主に捧げようではありませんか。(* 当日の通訳は石田みち子姉ですが、翻訳文はフィリピン協働委員の古賀直美姉のものを掲載しました。)



2005 年 10 月 9 日

巖原聖ヨハネ教会

聖書：マタイによる福音書 22 節 1 節 ~ 14 節

「神様の招き」

すばらしい祝賀の準備で嫌な経験をしたことがありますか。人を招待するために時間をかけ、食べ物の用意に気を配り、会場の配置を手伝ったのに、招待した人たちが全く来ないということが後になって分かったということはありますか。私がかつて教会でお話をするために人を招待した時にこのようなことがありました。招待された人は皆、どうして集まりに出席できなかったかということをおぼろげに覚えました。それは屈辱的な経験であり、困惑させるものでした。

今日の福音書では、王子に用意された結婚披露宴についてお話しします。王様が自らその準備をされました。話の中での偉大な王とは神自身のことです。慈悲深い神は食物だけでなく素晴らしい宴も提供されました。この宴は全ての人々が満足できるものでした。

神の子イエス = キリストを通じた魂の救済において、神は私たちに永遠の幸福のための全てのものを与えてくださいました。



(説教中のダグソン執事と通訳の牛島司祭)

招待客に結婚披露宴の招待状が届きました。そして、王は自分の僕たちに、「招待客がそのビッグイベントに気づくようにしなさいと言いました。しかし、招待客たちは別の予定を立てていたのです-----ある者たちは忙しく、またある者たちはその招待を冗談だと思っていて、ある者は自分の農場に向かって町を離れ、またある者は

売り買いをするために市場へ行き、そして別の者たちは僕たちに危害を加えたり殺したりしました。

はじめに招待された客はユダヤ人でした。彼らは「選ばれた民」でした。しかし旧約聖書の預言者たちは来ませんでした。洗礼者ヨハネや、神の王国は近いと彼らに言ったイエス＝キリスト自身でさえもです。ユダヤ人に神の王国が近いと伝え、魂の救済の申し出を納得させるためのキリストの復活の後で、伝道師たちや宣教師たちが送り込まれました。しかし、ユダヤ人はキリストの所にやってきませんでした-----来られなかったわけではなく来たくなかったのです。

キリストの魂の救済を軽く受け取ることは不注意なことであり、このことは重大な罪です。多くの人々が単なる不注意で亡くなり、永遠の罪を受けるのです。

人々が救世主(キリスト)に近づくことを他のことが妨げます。これらは商売や世俗的な仕事の利益かもしれません。テモテへの手紙第6章10節では、「なぜなら、金に対する愛は悪の根源であるから。」と語っています。そしてイエスは、マタイによる福音書第16章26節で「世界の全てを手に入れても、魂を失ってしまったらそのことは人に何の利益をもたらすのか。」と語っています。そうです。私たちは働かなければならないし勤勉でなければなりません。私たちの仕事は、私たちとキリストとの間にやってくるのではないということに注意深くならなければなりません。



(土曜日の集會に集まった人々・厳原)

その話の中で何が起こったのでしょうか。王は僕たちに、「田舎の道や畑に出かけて行って、出会う人誰でも結婚式に招待するように。」とおっしゃいました。だが

ら僕たちは田舎へ行き、尊敬できる農民であろうと、道端に座っているただ単にぶらぶらしている人であろうと、会う人皆を連れて帰りました。

(当時のユダヤ人は)キリストの、異邦人に対する申し出と魂の救済は、期待していませんでした。何と驚くべきことでしょう！福音の計画とはすべての場所にいる神の子であるすべての人々をキリストの所に集めるということなのです。このことに注目してください。・・・「私たち」はこの結婚披露宴に招待されています。あなたと私はこの結婚式に招待されています。偉大なる王は神ご自身です。そして神が用意された結婚披露宴に神を愛するすべての人々が出席するでしょう。主の宴に今日出席する私たちのようにです。神は私たちの一人一人それぞれをすばらしい宴に来るように招待したのです。

恐らく、あなたがたが初めてこの素晴らしい招待について知ったときのことを思い出すことができるでしょう。あなたがたが神やその息子イエス＝キリスト、そして魂の救済や豊かな人生についての彼の申し出について初めて聞いたときの事を。

しかし、気にしなければならぬひとつのことがあります。親しさは私たちを不注意にしたり無関心にしたりしないということに注意しましょう。神はせっかちな神ではありません。神は私たちを何度も招待されます。しかし永遠ではありません。もし私たちが神のすべての招待を拒絶し、呼びかけをあざ笑うとき、そのときついに私たちもまた拒絶されるでしょう。

(そのとき)私たちの神は「私が招待した人々は私の結婚披露宴に参加する価値がない。私はかわりに他の誰かをその場に招待するだろう。」とおっしゃるでしょう。

恐らく、あなたがたは何度かこの招待について聞いているでしょう。この神の招待をより真剣に、そして喜んで受け取りましょう。なぜなら、あなたがたがそのすばらしい披露宴に出席することよりすばらしいことが起こることはないのですから。あなたがたがその宴にやってくることを妨げる自己不信や無価値の感覚を許してはいけません。自分はまだ立派ではないと思ってはいけません。本当は、私たちの誰も招待されるに値しないのです。私たちの誰も正当な理由で神の宮殿にいる資格はな

いのです。しかし神は私たちのすべてを招待されました
-----そして、そのことがとても大切なのです。

宴のために正しくない服を着ている物乞いはどうでしょう。彼は郊外の暗闇に投げ出されました。恐らくあなたがたは「私は宴のために正しい服を持っていない。」と考えているでしょう。王はその宴ですべての人に清潔な衣服を与えます。あなたがたはそれを着るだけでよいのです-----なぜなら神がすでにくださっているのですから。

私たちは、罪に満ちた生活で身につけている衣服を着て宴に行く必要はありません。王自身の息子、イエス＝キリストは自らの血を洗い落とすために血を流しました。あなたがたが自分たちの罪深い生活を本当に後悔し、イエスの十字架の上での死に信頼を置くのなら、そのときあなたがたもすばらしい宴の歓迎された客となるでしょう。

それから私たちの王の招待を聞き続け、尊重し続けましょう。王は毎日私たちをお呼びになります。王は、ここでの信仰と世界での礼拝において自分の言うことを私たちに聞いてもらい、自分の呼びかけに答えてもらうために私たちをここに呼ばれました。神のことを愛するすべての人のためにおられる私たちの唯一の神によって用意されたそのすばらしい宴のために、お互いに協力して準備しましょう。 アーメン

(翻訳 牛島司祭)

旅行を終えたダグソン執事からの挨拶状

親切な案内役の人々と、整然とした道を歩き回ったり、九州教区の異なった教会の兄弟姉妹と共に交わったり、共に食事をする事など、日本でのこれらの経験を私に許して下さった神様に、本当に感謝いたします。

私が2005年9月27日から10月11日まで、丸々2週間、日本聖公会を訪問する機会を与えられたことは、大変な喜びであり、恵みでした。私は、第1日目福岡国際空港で、最初から五十嵐主教と同行の人々から、暖かい歓迎と交わりを味わせていただきました。

その暖かい思いは、私が教区内の教会や、老人ホーム、ハンセン病療養所などを訪ねる間中、教役者や会衆の皆

さんにお会いして、食事を共にしたり、兄弟姉妹と語り合ったり、いろんな名所を訪ねて地方の空気に触れる時に、ずっと失われることはありませんでした。

私が、大宰府天満宮、大濠公園、阿蘇山、小倉城と熊本城などを訪ね、温泉に浸かり、日本食を経験したことは、今も深く印象に残っています。

特に歓迎パーティーや食事をした時は、意義深い時間になりました。それは、私が持参した写真のアルバムを通して、フィリピン中央教区の働きを分かち合うことができたからです。私は、また、既にフィリピンを訪ねて下さったことのある人々にも、お目にかかれました。

私は、九州の美しさに魅了されました。緑の山々、タバコなど禁じられて、清潔で汚染されていない道路。人々は、交通ルールを厳格に守って、驚くほど訓練されています。

教会は、大きくはありませんが、きちんと秩序が保たれています。人々は、ほとんどが英語を話さないのですが、大変親切で、つつましやかな、もてなしの心を持っています。日本にはクリスチャンは少数ですが、私の訪ねた教会で、私はこのようなことを見てきたのです。

ですから私は、フランスス小林司祭が、若者や大人たちをワークキャンプに連れてくる働きの重要さを理解できました。これが、福音伝道のひとつの方法であり、また、異なる国籍の信徒たちと交わることの喜びを参加者に気付かせることなのです。そして、それはまた、彼らが本国に帰った時、教会の働きにもっと深く関わるように挑戦する方法でもあるのです。

私の、素晴らしく、想い出深い2週間の日本滞在の間に出会った人々に心からの感謝をささげます。(訳者注釈:このあと、ダグソン執事は、30人以上の人々の名前を書き出していますが、それは省略させていただきます。)

アリガトウゴザイマス! マタ、アイマショウ。

(注:ローマ字で書いています)

2005年11月10日

フィリピン中央教区 シルベスタ・S・ダグソン執事

来年のキャンプに向けて

2004年、2005年と続けてきたフィリピンでのワークキャンプは、来年は2月28日(火)から3月7日(火)という日程がまきました。毎年、大学生の参加がしやすい3月上旬です。しかし、2005年は、青年だけでなく、壮年の参加者もあって、いい交わりができたので、働ける人は、遠慮なく申し込んでください。

今年は、今まで独自に交わりを続けてきた、東京聖三一教会の人々も、一緒に働きたい、ということです。参加者の間でも、いろんな出会いがあると思います。

フィリピン中央教区では、タクロバオ主教から、各伝道区長を通じて、各教会にワークキャンプのことが伝わっていて、11月中には、キャンプの概要が、日本側に伝わって来そうです。

場所や募集定員が決まり次第、各教会には連絡いたしますので、準備ください。

例年のように、1月中に参加者を確定し、2月11日あたりに、準備の会合を持つと思っています。

今年の経費を見ると、7名の参加者で、68万円くらい、かかっています。一人当たり、約10万円が必要なキャンプです。今年の場合は、参加者に5万円の自己負担をお願いしました。おそらく来年も似たような額が参加費になることでしょう。そして、それ以外は、教区の援助によります。

今年のワークキャンプから



教会の屋根のペンキ塗り



礼拝堂の床のセメント打ち準備



小学校の子どもたちと交歓会



青年たちとの交歓会(右端はダグソン夫人シャロンさん)